

2023年1月8日 説教「義のために迫害される者」

列王記第二 6章 24～33節

しばらくはイスラエルとアラムには争いごとは起きないと思われましたが、実際はそうなりませんでした。

1. 争いと飢饉 (24～27節)

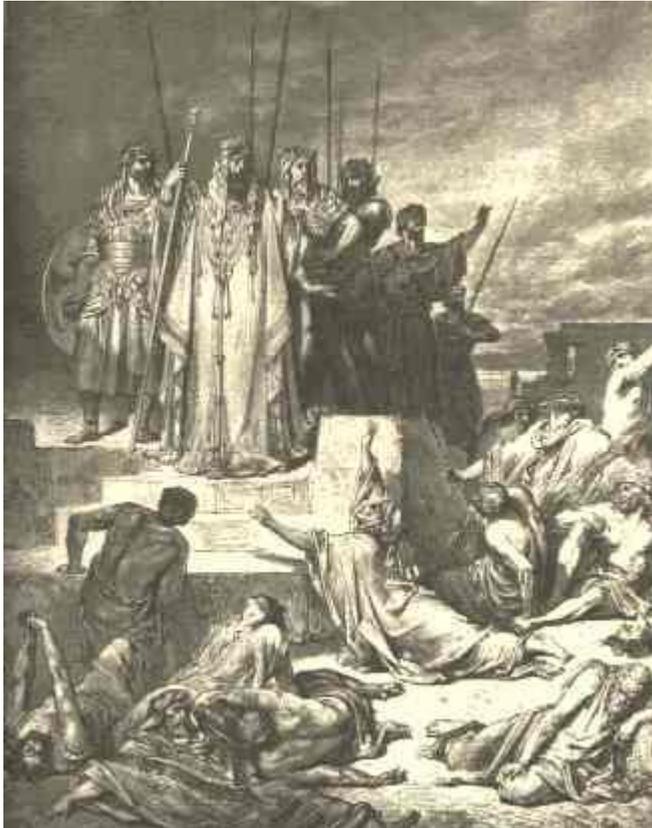
①サマリヤに (24)「この後、アラムの王ベン・ハダデは全軍を召集し、サマリヤに上って来て、これを包囲した。」アラムの攻撃は止まりませんでした。王ベン・ハダデとは列王記 I の 21 章に出てきた王が継続していたと考えて差支えありません。彼の軍はイスラエルの中心サマリヤを包囲したのです。

②ひどい飢饉 (25)「そのころ、サマリヤには、ひどいききんがあった。そのうえ、彼らが包囲していたので、ろばの頭一つが銀八十シケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シケルで売られるようになった。」イスラエルのサマリヤにあっての問題は、外敵との戦いだけではありませんでした。それに伴い、ひどい飢饉があったのです。それがどれほどであったかですが、その具体例がここに出されています。ろばの頭は普通なら、食料にはしませんが、それが銀80シケル(2万円?)で売買され、食糧の燃料になる鳩の糞一カブ(1.3リットル)の四分の一が5シケル(千円?)という、物価上昇を生んでいたのです。これでは、庶民は生きていくことができません。ともかく食べ物がないのです。

③女の訴え (26～27)「イスラエルの王が城壁の上を通りかかると、ひとりの女が彼に叫んで言った。『王さま。お救いください。』王は言った。『主があなたを救われないのなら、どのようにして、私があなたを救うことができようか。打ち場の物をもってか。それとも、酒ぶねの物をもってか。』」そんな時に、イスラエルの王は城壁の上を通ったのです。王とはエホアハズかヨアシュだと思われる。その姿を見ると、女が叫んだのです。「お救いください」。すると、王は信仰的な言葉を伝えます。「あなたを救うのは主なる神以外ありませんよ。私にはそれはできません。」「打ち場(脱穀のための平場)か酒ぶね(ぶどうの実を踏み压榨する場所)で、それらは解決できるのか、という実際的な質問でした。つまり、そのような所から得た食料を供給すれば良いのかとたずねます。

2. 飢饉がもたらした悲劇 (27～31節)

①二人の女の取り決め (28)「それから王は彼女に尋ねた。『いったい、どうしたというのか。』彼女は答えた。『この女が私に『あなたの子どもをよこしなさい。私たちはきょう、それを食べて、あすは私の子どもを食べましょう。』と言ったのです。』」他にもありそうな様子を見て、王は彼女にさらにも尋ねます。すると彼女は、近くの女性を指さしながら、驚くべきことを言うのでした。「あなたの子供をよこしなさい。私たちは、今日はその子を食べて、明日は自分の子どもを食べることにしますから。」なんという提案でしょう。だれも、受け入れることができないものです。



②子どもを食べ (29) 「それで、私たちは、私の子どもを煮て、食べました。その翌日、私は彼女に『さあ、あなたの子どものよこしなさい。私たちはそれを食べましょう。』と言ったのですが、彼女は自分の子どもを隠してしまったのです。』しかし、彼女は、自分たちの子どもを煮て食べたというのです。つまり、もう一人の女が言うように、自分の子どもを食べたが、今度はあなたの子どものよこしなさい。私達はその子を食べるからと返したのです。聞きたくない話ですが、これは預言されていました。「あなたがたは、包囲と、敵がもたらす窮乏とのために、あなたの身から生まれた者、あなたの神、主が与えてくださった息子や娘の肉を食べるようになる」(申命 28:53)。自分に限ってそんなことはと思うでしょう。しかし、「私の民の娘の破滅のとき、あわれみ深い女たちさえ、自分の手で自分の子どもを煮て、自分たちの食物とした。」(哀歌 4:10)とあります。

③服の下の荒布 (30~31) 「王はこの女の言うことを聞くと自分の服を引き裂いた。彼は城壁の上を通っていたので、民が見ると、なんと、王は服の下に荒布を着ていた。彼は言った。『きょう、シャファテの子エリシャの首が彼の上についていれば、神がこの私を幾重にも罰せられますように。』」イスラエル王は女の言葉を聞いて、悲しみの表現として、自分の服を引き裂きました。すると民は王が服の下に肌着として荒布を着ているのがわかりました。そして、彼はエリシャに矛先を向けて、このような悲惨な事態に至ったのは、一重にエリシャのせいだ。彼の上に神の裁きの御手がくだるよにと述べたのです。

3. エリシャの対応 (32~33 節)

①エリシャと長老達 (32) 「エリシャは自分の家にすわっており、長老たちも彼といっしょにすわっていた。王はひとりの者を自分のもとから遣わした。」一方、エリシャは自分の家に長老たちと一緒に座っていました。この家というのはサマリヤにあったと考えられます。イスラエル王はそのエリシャの命を奪うために刺客ともいえる者を送ったのです。

②刺客が送られ (32) 「しかし、その使者がエリシャのところに着く前に、エリシャは長老たちに言った。『あの人殺しが、私の首をはねに人を遣わしたのをご存じですか。気をつけなさい。使者が来たら、戸をしめ、戸を押しても入れないようにしなさい。そのうしろに、彼の主君の足音がするではありませんか。』しかし、エリシャには神が直接に語りかけてくださっていました。「私のところに王が刺客を送って、私を殺そうとしています。ぜひ、覚えてください。王の使者を名乗る者が来たとしても、戸を閉めたままにして、中に入れないようにしてください。」

③これ以上何を (33) 「彼がまだ彼らと話しているうちに、使者が彼のところに下って来て言った。『見よ。これは、主からのわざわいだ。これ以上、何を私は主に期待しなければならないのか。』」さ中にその使者がやって来ました。王からの伝達の言葉は、神の災いがこれほどのものであれば、これ以上、神を信頼することもできないと言ったものでした。

《結論》今朝の聖書箇所は読み飛ばしたくなるのではないのでしょうか。母が子を食べるといふ、絶句してしまうような話があるからです。いくらお腹が空いていても、普通の精神状態ではできないことでしょう。ところが、このことについてはレビ記、申命記に預言されているのです。飢饉の問題と人間が極限ではそのようになる可能性があるということです。

上記の問題は、今回はそこまでとして、あとは二つのことを結論として考えたいと思います。第一には、この飢饉とそのことのゆえに女性がその子どもを食べるといふ報告を受けたイスラエル王の対応についてです。王はそのことの原因は、エリシャにあるとしました。イスラエル王は、預言者エリシャこそが、これらの問題の原因をつくっていると思ひこんだのです。責任をエリシャに向け、責任を取らせることによって、問題に決着をつけようとしたのです。飢饉をエリシャが起こすことは不可能です。母が子を食べて生き残ることを、エリシャが指導をするはずがありません。律法違反だからです。王がエリシャを責めるのは、責任免れとしか言えません。しかし、こうしたことは、私達の日常でもあります。不幸や失敗や難題に遭遇した時に、人に責任をなすりつけやすいです。何か問題が生じると、自分に一因があることがわかっていても、他の人に原因を求めたりしやすいのです。まさに、これは私達の罪の構造です。そのことを認めたら、神の前に具体的に告白していきましょう。

第二に、エリシャが王から責任を取られ、命さえ取られようとしている事態についてです。これはまさに、いわれのない不法な迫害と言って良いでしょう。エリシャは防衛を強化しなければ、まさに命を取られようとしています。外国の王ではなく、自らの国イスラエルの王から、命をねらわれているのです。イエス・キリストは言われました。「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです」(マタイ 5:10~11)。これは山上の説教の冒頭にある八つの幸いの最後の部分です。キリストは「義の為に」「キリストのゆえに」「ありもしないことで」、迫害を受けることは幸いです、と教えられるのです。その理由として、「天ではあなたがたの報いは大きい」(12 節)からと言われます。エリシャはこの真理を学んでいました。ここにも「あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」(12 節)はエリシャをも含んでいたことでしょう。

キリスト教史においても、多くの迫害がありました。ステパノに始まる初代教会では多くのクリスチャンが迫害を受け、殉教者も出ました。私達の歩みにおいても、キリストのゆえに迫害、いじめなどに遭うことがあります。「狭い門から入りなさい」とあるように、その時に、すぐにそれを否定的にとらえるのではなく、むしろ「これは幸いなのだ。」。真の喜びが備えられる可能性があるのだと考えてみたいのです。これは主が最も近くにくる時なのだと思います。祈りたいのです。ルター作詞作曲の歌。『悪魔、世に満ちて、よしおどすとも、神の真理こそは、わが内にあれ』(讚美歌 267:3)。ルターの立証です。